



.....
監督＝カール・フランクリン/
出演＝デンゼル・ワシントン/
エヴァ・メンデス／サナ・レイ
サン／ディーン・ケイン（東芝
エンタテインメント配給／2003
年アメリカ映画／105分）
.....

警察署長マットの不倫相手である、美しい人妻が火災で死亡。その携帯にはマットの着信履歴がいっぱいの上、死亡直前、生命保険の受取人がマットに変更。最悪の事態だ。早く真犯人を挙げなければ。タイムリミットはすぐ近くだ。マットとこれを取り巻く2人の魅力的な女性の間で繰り広げられる楽しい(?) サスペンス。「男は甘いね」というオチが実に面白い……。

🎬 主人公は警察署長

主人公マット（デンゼル・ワシントン）は、フロリダ州の小島バニアン・キー（実在しない架空の島）の警察署長。といっても署員わずか4人の田舎警察。しかしマットは優秀で勤勉、そして部下からの信頼も厚い。しかし妻のアレックス（エヴァ・メンデス）とは、8カ月間別居中。それは、アレックスも同じ警察官だが、上昇志向が強く、今は刑事となってマイアミ警察の殺人課に勤務することになったことが一因らしい……？ 今もアレックスを愛しているマットは、妻から近々離婚の申出がされそうだとすることで悩んでいるが、実はマットも聖人君子ではない。アレックスを愛していると言いながら、ちゃっかりと「不倫」をお楽しみ中。そのお相手は高校の時の2年後輩の今は人妻となっているアン（サナ・レイサン）。アンは暴力をふるう夫クリス（ディーン・ケイン）の目を避けて、やさしいマットを秘かに自宅に呼び、情事を重ねていた。しかし、地元のまちで、ホントにこんなことが可能なの……？ そう突き詰めると元も子もない。

あくまで、このドラマの設定だと納得(?)して観ていこう。

不倫のお相手アンにガンの宣告!

今日もマットは秘かにアンとお楽しみ中だったが、仕事の電話でコトを中断。これは職務優先だからやむをえない。その数日後、なぜかマットは、アンから兄という立場で一緒に病院に行ってくれと頼まれて同行。するとそこで、アンの主治医フリーランド医師は、アンの肝臓などにガンが転移していると報告。そして余命はあと数カ月とのこと……。ショックのあまり外へ飛び出すアン。「何とか治療法を……。」と聞き出そうとするマットに対し、フリーランド医師はスイスでの代替医療を紹介するが、「治療費は高額だし、助かる保証もない」と冷たいお言葉。しかしそれでも、マットはその治療に一縷の望みをかけようとした。何ともマットはいい人だ……。

アンの決心とマットの決心

死の宣告にも等しい「ガン告知」を受けたアンの気持は、乱れに乱れた。時にはアンを慰めようとするマットに対して、当たり散らすことも……。しかし次に述べるように、結局アンは、100万ドルという生命保険の保険金受取人を、夫のクリスからマットに変更した書類をマットに手渡しして、1人まちを出て行く決心を伝えた。もちろんマットとしては、それで「ハイハイ」というわけにはいかない。このようなアンの自分に対する「愛情」に報いるために、マットは何をすべきなのか? そこでマットが導いた結論は……? 何と、警察署長として金庫に保管してあった、麻薬犯罪の証拠品である48万5000ドルを、どうせ再審が始まるまで保管しておくだけの金だから、これを一時的に流用しようという恐ろしい決断だった(こういうシーンは、国民の教育上あまりよろしくないこと明らかだが……)。そして鞆に入れたこの大金をアンに手渡し、「今晚11時に、俺の家に来い。一緒にスイスに行こう」と約束して別れたが……。

アンの自宅の火災と2人の死体

ところがアンは11時になっても現れない。一体どうしたのか。再三携帯電話

にかけても通じない。そこで仕方なくアンの家まで行き、近くをウロウロしていると、ヤバイことに隣人にそのあやしげな姿を目撃される始末。悶々と眠れない夜を過ごしたマットは、翌朝、突然火災にあったアンの自宅の残骸の中で2人（アンとクリス）の無残な焼死体を見ることになってしまった。48万5000ドルも一緒に灰になってしまったのか……？ そんな中、明らかに「放火」を示す証拠が発見された。そのうえマイアミ警察からは、何と、殺人課刑事として本件を担当することになったマットの妻のアレックスがさっそうと登場してきたのだった。

生命保険契約をめぐる2つの疑問

ガン告知を受けた後、アンは生命保険契約について2つの試みをする。その1つは、この生命保険を一定の金額に評価して会社に売却すること。すなわち会社は、アンの生きる期間の長短を評価して、この生命保険を一定の金額で買い取り、アンが死亡した時は100万ドルの死亡保険金を会社が受領するわけだ。会社はアンの死亡により、100万ドルを受領できることは確実だが、早く死ねば会社の儲けは大きくなるし、長生きすれば会社の儲けは少ないことになる。要するに人の生命の長短をバクチにした「商売」。この映画では、こういう話し合いをするだけで実現しなかったからいいものの、ホントにこんなことが許されるのかどうかは大いに疑問があるところ。もう1つは、結果としては、「保険金受取人」の名義を、夫クリスから愛人のマットに変更したわけだが、本来、「保険金受取人変更」の権限は、「保険契約者」がもっているもので、「被保険者」のアンができることではない。そして、この映画の設定では、保険契約者はクリスのように私は理解したのだが（私の誤解かもしれない）、もしそうであればなぜ、どのようにして、この変更ができたのかが実はよくわからない。ちなみに、生命保険の4つの基礎用語の定義は次のとおりだから、この際勉強しておくとう便利。

- ① 保険契約者＝生命保険に加入して保険契約におけるすべての権利と義務を有する人
- ② 保険者＝保険会社
- ③ 被保険者＝保険の対象とされる人
- ④ 保険金受取人＝保険契約者から保険金の受取りを指定された人

タイトルの意味するもの

邦題は『タイムリミット』だが、原題は『OUT OF TIME』。つまり、「時間切れ！」ということ。果たして一体何の時間切れなのか？ それはつまり、マットが「真犯人」を一刻も早く捜し出さなければ、マットが犯人として逮捕されてしまうタイムリミットということだ。状況はマットにとって最悪。死亡したはずの「被害者」アンの携帯電話の着信履歴を調べれば、マットからの通話がいっぱい。また放火の前夜、家の近くをウロウロしているマットは近所の人に目撃されている。そのうえ、死亡の直前に保険金受取人が夫のクリスからマットに変更。ヤバイことだらけだ。マットは、妻のアレックスが指揮する捜査に協力したり、その中から情報をもらったりする一方、やむなくかなりヤバイ「捜査妨害」をやりながら、自ら「真犯人」捜しに乗り出したが……。

アッと驚く真相が次々と

最初に明らかになったアッと驚く真相は、何と、アンは末期ガンなどではなかったということ。「そんなバカな！ 俺はアンと一緒にフリーランド医師の口から直接聞いた！」と、マットはフリーランド医師の部屋に駆けつけた。すると、何とそこには、全く別人のフリーランド医師が……。マットは、マンマと一杯食わされていたわけだ。「しかし一体誰が？ 何のために？」「まさか、あの俺の愛するアンが……？」。そんなパニック状態になりながらも、さすが一流の警察署長。八面六臂の大活躍だ。その肉体的・精神的タフさぶりには恐れ入るばかり。このような苦悩を抱えながら敢然と犯人捜しに走り回るマットを、さすが「オスカー俳優」のデンゼル・ワシントンが見事に演じている。

妻アレックスは？

全体の捜査を指揮するマイアミ警察殺人課のアレックス刑事の行動は、マットによる数々の「妨害工作」により、後手後手を踏んでいたが、そのカッコいい指揮ぶりは、その美貌と相まってお見事。しかし、何とも困ったことに捜査の過程で、どうも「うちのダンナが怪しい……」となってきた。そして、次々とそれを

裏付ける資料が……。遂には、証拠品の48万5000ドルを手渡せと要求してFBIが現れたり、保険金受取人がマットに変更されていることがわかったり。しだいにアレックスの怒りはピークに……。

悪いヤツは誰だ？

この映画での悪いヤツは実は〇〇だが、それはここでは言えない。しかし、それを追ってマットが翻弄される姿は、少しユーモラスなところがあるものの、実は生命がけ。そしてこのマットの生命がけの奮闘の甲斐あって、マットは負傷しながらも何とかこの事件を無事解決。メデタシ、メデタシとなるが……。

わからん女心

やっとなら傷が治り、釣り糸を垂れているマットの家を訪れたのはアレックス。「荷物を運びに来た」と言うので、マットが「オーケー」と答え、話していると、何となく今日は様子が違ってえらくやさしい……。「アレ、変だな？」と思ってみていると、実は話が逆。つまり、外に出していた荷物を、この家に運び込んできた。つまり、マットとヨリを戻す決心をしたということだ。自分の亭主が別居中、①浮気をしていたこと、②その浮気相手のガンの治療のため、48万5000ドルの公金横領までしたこと、③そしてその治療のため2人でスイスに「駆け落ち」しようとしていたことが明らかになったにもかかわらずだ。このアレックスの「心変わり」は、事件の捜査を通じて示されたマットの警察官としての誠実な人柄や能力を理解したことによるものだろうが、ホントにこんなことでアレックスの女心は変わるの？ きっと、これは映画の作り話でしょう……？

所詮甘い男心

この映画の主人公は言うまでもなくマット、すなわちデンゼル・ワシントンだが、この映画のテーマは、私流に理解すればマットの「男心の甘さ」だ。第1に、警察署長でありながら、同じまちの中の人妻と不倫。しかも夫のクリスから妻との不倫を疑われていることがわかって、平然とやり返すその度胸。これは立派といえば立派なものだが、なかなかそこまでは……。第2に、浮気中のアン

をこれだけ愛していると言い、かつそれに合致する行動をとりながら他方で別居中の妻とヨリを戻したいと真剣に考えているらしく、共同捜査の最中にもアレックスに「君を愛している」とのたまっていること。第3に、最後にすべてのことがバレたうえで、意外にもアレックスがマットの元に戻ってくる決心をしたところ、マットは「男は時々バカなことをするものだ。俺が愛しているのは君だけだ」という言葉でうまくおさめてしまう(?)こと。ホントにおさまっているのかどうかは、今後の2人の夫婦生活を見なければわからないが、そんなことでおさまるはずはない。少なくとも一生女房の尻に敷かれることはまちがいない。

この映画から学ぶべき教訓は、「女はコワイ」「女の甘い言葉に騙されるな」ということ。男性の観客の皆さんはよく心しよう。そして、まず俺自身がこの教訓をしっかりと頭の中に刻みつけなければ……。何！今さらもう遅いって……？それは、大きなお世話というもの。 2004(平成16)年2月19日記

『タイムリミット』に学ぶ女のコワさ

今、公開中の『タイムリミット』が面白い。主人公Aはデンゼル・ワシントン。わずかに4人の田舎警察の署長だが、美しいエリート刑事の妻Bとは別居中。それをいいことにAはちゃっかり、今は人妻となっている高校時代の同級生Cと不倫中という設定だ。

この映画のポイント1は、Aが麻薬犯罪の証拠品として職務上金庫に保管中の48万円の現金。ポイント2は、Cの末期がんが発見されたこと。そこでCは生命保険の受取人名義を夫からAに変更し、1人町を出ていく決心をする。これぞ不倫中の女の鑑(?)ともいべき決心だが、そこで男たるもの(?)「ハイそうですか」とはいかない。Aは愛するCのガン治療のため金庫内の公金に手を出すことに……。するとその

日、Cの家に火災が発生。発見されたのはCとその夫の黒焦げ死体(?)。Cに手渡した48万円も一瞬のうちに灰に(?)。この捜査を指揮するのはBだ。最初に明らかにになったアッと驚く事実は、Cは末期がんで



はなかったこと。「そんなバカな！おれはCにだまされていたのか？」と一人悩むA。そこからAの犯人捜しが始まった。

「タイムリミット」とは「時間切れ！」の意味。すなわちAが真犯人を挙げなければ、状況証拠からAが犯人とされることは必至。

「危機一髪」を繰り返しながら、息もつかせぬ真犯人捜しのスリルとサスペンスはさすが一級品だ。さあ、Cの焼死体は本物か？そして犯人はだれか？犯人捜しの妙を十分に楽しむことができる映画だ。

それにしても男は甘い。がん告知を受けたCのためにAが必死に動く姿は、不倫の仲とはいえ男の鑑(?)。一方、わからないのは女心だ。夫への疑惑に苦悩しながらBが捜査を進めた結果、真犯人は判明したものの同時にわかったのは夫の不倫。はたして結末は、

世の男性諸君がこの映画から学ぶべきは女のコワさ。とりわけCについては「女の甘い言葉にだまされるな！」という教訓をオスカー俳優とともにしっかりと学びたいものだ。

(弁護士 坂和章平)